

A consideration about the logic of the local elite's way to consume and inherit bronze mirrors in the prestige good system of the Early Kofun Period: a case study in northern Kyusyu

辻田, 淳一郎

九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 講師 : 日本考古学

<https://doi.org/10.15017/3596>

出版情報 : 史淵. 144, pp.1-33, 2007-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理 —北部九州地域を対象として—

辻田 淳一郎

1. はじめに

古墳時代前期は、日本列島各地で前方後円墳が出現し、近畿地方を中心とした広域的政治秩序が形成された時期として位置づけられる。問題はその具体的な内実であるが、筆者はこれまで古墳時代の開始過程について、広域的な威信財システムの成立・展開過程として捉えてきた(辻田 2006a)。そこにおいては、広域的地域間関係を形成した原動力を、政治的中心としてのヤマト政権のみではなく、むしろ威信財を求めて競合した各地の上位層の側に求めた。いわば、広域的地域間関係の出現を中心一周辺関係の様相の形成とみた場合に、中心部からの視点のみではなく、周辺部の視点から論を立ち上げることによって、広域的地域間関係の実態を捉え直す試みである。その上で、あらためて列島社会全体の動きとして再構築するというのが筆者の立場である。本稿はこの問題に関する具体的分析事例の1つを提示するものである。

いま述べたような問題を考える上で有効な考古資料の1つとして、古墳に副葬される銅鏡がある。銅鏡は、それ自体年代的な変遷を辿ることが可能であり、また古墳の時期的変遷やそこでの副葬状況などとあわせて、広域的な流通形態や、各地での入手・使用・消費についてのモデル化が可能な遺物である (cf. 森下 1997)。本稿ではこのような観点から、鏡の配布と伝世およびその論理について、北部九州地域を対象として、広域的政治秩序の具体相を明らかにすることを目的として分析を行う。

2. 問題の所在

まずはじめに、古墳時代における鏡の配布・伝世の問題、それを保有する主体の問題、そして北部九州における古墳時代の開始の問題について、それぞれ先行研究の成果と問題点を整理する。

(1) 古墳時代前期における鏡の配布と伝世をめぐる諸問題

古墳時代前期の鏡の配布および伝世の問題については、ヤマト政権による三角縁神獣鏡の配布およびその同範鏡分有関係を、伝世鏡の廃棄の問題とあわせて貴族の権威の革新という観点から有機的に説明した小林行雄氏の研究(1955・1961)以来様々な見解が提示されているが、この小林氏の見解は、弥生時代から古墳時代への社会変化を考古学的に説明した点で、大枠としては現在も継承されているといえよう。この小林氏の説に対して、内藤晃氏(1959・1960)は弥生時代の首長権の象徴物としての伝世鏡と位置づけられた漢式鏡などについても、基本的に古墳時代以降に三角縁神獣鏡と同様にヤマト政権から配布されたものと捉えた(内藤 1959)。また同範鏡分有関係についてもそれらを副葬する古墳の被葬者同士の直接的な分与の関係とすることに対して慎重な姿勢を示しており、それによって鏡の配布主体を想定する論理を批判している(内藤 1960)。内藤氏の提言は、同範鏡論・伝世鏡論を一連の論理過程として説明した小林氏の議論の問題点を指摘したものであるが、その後の古墳時代研究では正面から取り上げられることなく、小林氏の同範鏡論・伝世鏡論によって古墳時代の開始過程が説明されてきた。筆者は内藤氏の指摘は漢鏡研究が進展し、かつて伝世鏡と呼ばれた漢鏡の具体像が明らかになりつつある現時点においてこそ、検証すべき重要な視点であると考ええる。^(註1)

その後、同様な視点から、高橋徹氏(1986)や森格也氏(1987)が弥生時代出土漢式鏡と古墳時代出土鏡との対比をもとに、古墳時代出土漢式鏡が古墳時代に列島に流入し、各地に流通した可能性を指摘している。他方、岡村秀典氏は自身の漢鏡編年にもとづく分析の結果、「漢鏡5期・6期・7期の第1段階」

の鏡と「漢鏡 7 期の第 2 段階以降」の鏡との間で列島内での分布が異なることを指摘し、近畿を中心とした分布形成へと移行する画期を 2 世紀後半以降に求めた（岡村 1986・1990・1999）。氏の議論においては、漢鏡の製作年代と列島への流入年代・列島内での流通年代が区別されていないため、「漢鏡 5 期の鏡」という表現する場合、「漢鏡 5 期（＝ 1 世紀後半代）」に製作された鏡がリアルタイムで列島各地に流通した可能性をも同時に含みこんでしまうことから、この点の可否が伝世論の評価という意味で議論の焦点の一つといえることができる。（註 2）

筆者はこうした問題について、製作年代だけでなく、鏡の出土遺跡の年代や完形鏡・破鏡といった使用形態の違いという観点から検討し、弥生時代が基本的に破鏡の北部九州を起点とした東方伝播と一部での完形鏡破砕副葬という点で特徴づけられるのに対し、古墳時代は新たに 3 世紀第 2 四半期後半以後に特に近畿地方に集中的に流入した完形鏡が各地に流通し、副葬されるという可能性を指摘した。またその場合、前期古墳から出土する完形後漢鏡・魏晉鏡は基本的に大型のものが近畿周辺に、小型のものが各地に分散することを明らかにした。これは、古墳時代前期において副葬される完形の後漢鏡・魏晉鏡が基本的に列島内での伝世品ではなくヤマト政権から分配されたものとする見方であり、いわば上述の内藤氏、高橋氏、森氏らの視点に連なるものである。他方で、前期古墳から出土する破鏡の多くが、弥生時代以来の各地での伝世品である可能性を指摘している（辻田 2001・2005a）。

また倭製鏡に関しては、面径の大小のばらつきが大きくまたその分布にも偏りがあることが早くから指摘されているが（e.g. 富岡 1920；田中 1979）、その流通においても面径の大小にもとづく配布時の差異化という点が指摘され、各地の古墳の動向とあわせて検討が行われてきている（和田 1986；車崎 1993；下垣 2003b）。こうした倭製鏡の流通形態は、基本的に上述の古墳時代初頭以降における完形後漢鏡・魏晉鏡の流通から連続するものと考えることができる。

問題は、こうした完形後漢鏡・魏晉鏡・倭製鏡に三角縁神獸鏡を加えた種々の鏡が各地の上位層によってどのように入手され、また副葬されたかという点

である。この点について、次に鏡の保有主体という観点から検討する。

(2) 鏡の保有主体について

鏡を保有する、あるいは使用・消費する主体をどのように捉えるのかについては、小林行雄氏の同範鏡論・伝世鏡論をはじめとして、様々な議論がある。小林氏は古墳の出現を貴族の権威の革新；男系世襲制の確立と結びつけて論じ、その観点から伝世鏡の廃棄を説明した（小林 1955）。他方で、世襲制が確立すれば次世代においては鏡の入手は不要とする指摘（内藤 1959）や、鏡の型式差や組合せの差が古墳の時期差の指標となることから、各世代で鏡が入手されたという点で、首長権の世代間継承が不安定であった可能性が指摘されている（都出 1970；近藤 1983）。また出土人骨にもとづく検討から、古墳時代前半期においては父系直系ではなく基本的に双系的親族関係であったとする田中良之氏の研究（1995・2000など）により、現在では古墳被葬者とその周辺の上位層の捉え方が大きく変化しつつあるといえよう。

ここにおいて、鏡の保有主体について具体的にモデルを提示しているのが、森下章司氏の研究（1998a）である。氏は、鏡の年代と古墳の年代が一致する場合とその差が開く場合を検討し、古墳時代において鏡の伝世が一般的な事象であることを指摘し、いわゆる「首長系譜」にほぼ相当するような集団単位による鏡の保有が通例であることを論じている。この研究は、古墳時代の政治支配のあり方や集団構成の原理を考える上で重要な視点を提供しており、先に挙げた都出氏や近藤氏の指摘、そして田中氏による被葬者の親族関係の問題とあわせて、より具体的に検討を進める必要があると考える。

この問題と関連して、鏡の入手形態の問題についても触れておきたい。こうしたヤマト政権から各地の上位層への鏡の配布に関しては、小林氏の研究以来「下賜」というイメージが長く定着しているが、春成秀爾氏は「下賜」以外の場合も含め、大きく5つの可能性を想定している（春成1984）。この中で氏は、各地の首長への配布の第1回目の契機は地方首長の側からの「朝貢」にあったとし、第2回目以降各地の首長の継承儀式に際し、「大和部族同盟」の側からの使

臣の派遣と鏡の授与が行われたと捉えている。また川西宏幸氏は、大きく「政権側が携えていく下向型」と、「政権のもとに出向いていく参向型」という大きく2つに区分している(川西 2000)。川西氏は前期の三角縁神獣鏡は下向型であり、古墳時代後半期に参向型が一般的になるとしているが、下垣仁志氏(2003b)は古墳時代前期倭製鏡の流通における面径の大小のもつ効果という観点から、「参向型」の入手形態をとる可能性を指摘する。また森下章司氏(2005b)は、こうした「参向型」の入手形態こそが古墳時代を通じて一貫したあり方であった可能性を指摘している。筆者自身も、後述するように古墳時代前期の各地域社会における突出した主導的存在の不在や、各地の上位層による散発的な鏡の入手の可能性といった状況から、「下向型」的「下賜」ののちに各地域内での二次的な配布が行われたというよりは、下垣氏・森下氏らが指摘するような、「参向型」の入手形態を想定するのが妥当であると考えている。このことは、古墳時代前期における各地の上位層とヤマト政権中枢とのつながりを考える上で重要な論点であり、以下の分析において具体的に検討したい。

(3) 北部九州における古墳時代の開始と展開に関する議論

ここまで古墳時代前期における鏡の配布・伝世の問題についてみてきたが、問題はそうした鏡の流通・使用・消費についての検討が、各地の古墳時代開始過程に関する議論にどのような影響を与えるのかという点である。以下、北部九州について概観する。

北部九州地域における古墳時代、特に古墳時代前期や古墳時代の開始過程については、早くから「畿内古墳文化の伝播」(小林 1950; 樋口 1955)、「畿内型古墳の伝播」(小田 1966・1970)といった脈絡で論じられてきた。その中で、特に「畿内」的要素を持つ初期大型前方後円墳として、多量の三角縁神獣鏡を副葬し、竪穴式石槨を有する福岡県石塚山古墳が挙げられ、その位置付けが論じられてきた。

その一方で、玄界灘沿岸地域の古墳時代開始前後における外来系・在地系土器の動態を含めた土器相の変遷(e.g.岩永 1989; 溝口 1988; 久住 1999)や古

墳の時期的変遷の整理（久住 2002・2006）、あるいは埋葬施設の階層性に関する議論の進展（吉留 1989・1990・1991；北條 1990；重藤・西 1995）などにより、北部九州における古墳時代の開始は、近畿地方からの一方向的な影響や広域秩序という観点のみならず、在地社会における独自の論理や戦略を如何に読み解くかという点が問題となってきた。このような動きは、いわゆる「定型的」な前方後円墳が近畿で出現し、それが各地へ拡散したとする従来の見方についての見直し、および古墳時代的地域間関係をそれ以前に遡らせて考えるいわば“遡上の論理”への再検討（北條 1999；北條他 2000；溝口 2000a 他）における論点とも重なるといえよう。

この問題に関連して、銅鏡研究の観点でいえば、弥生時代中期以来鏡の副葬が活発に行われるこの地域での古墳時代のあり方が、弥生時代後期～終末期の状況から連続的に捉えることができるのかという点が大きな問題となる。この問題は、伝世鏡のみにとどまらず、列島規模での古墳時代開始論にも波及する問題であり、その中で北部九州の古墳時代の開始・展開の過程がどのように説明されるのかという点が問題といえよう。これについては筆者もこれまで破鏡などを素材として一部検討を行ってきており（辻田 2005a）、その成果をも踏まえつつ議論を進めたいと考える。

(4) 小結：問題設定

以上、北部九州における古墳時代開始論、そして古墳時代前期における鏡の配布と伝世の論理に関する研究史と問題の所在について概観した。ここで具体的な論点は、大きく次の3点に整理される：1) 北部九州各地における鏡の副葬・伝世のあり方にもとづく在地社会の論理および戦略についてのモデル化、2) ヤマト政権の側における戦略と在地社会の論理との相互作用とその帰結がどのようなものであったのかを明らかにすること、3) そこにおける北部九州古墳時代前期社会の特質を明らかにすること、である。以下、具体的に分析を行う。

3. 資料と方法

(1) 古墳被葬者と「上位層」

前期古墳に限らず、古墳は、各小平野程度の範囲内で時期的に連続して築かれることが多い。これらは「首長（墓）系譜」と呼ばれ、その変動パターンについての研究がこれまでも進められてきた（e.g.都出 1988；都出編 1999など）。こうした「首長（墓）系譜」については、基本的には古墳被葬者を代表者とした集団単位として指定することが可能であるが、同時期に規模が異なる前方後円墳が近接した地域で併存する場合も多く、また同一古墳に埋葬施設が複数存在する事例も広く認められることから、被葬者の親族関係・階層関係・性別・年齢・社会的職掌などとの関連において、実際の集団構成は非常に複雑であったと考えられる。またこうした「首長（墓）系譜」が示す現象とその背後にある集団の実態が古墳時代前期から後期を通じて一貫して同質的なものであるのかという点についても、被葬者の親族関係（田中 1995・2003・2004）や集落の動態などとあわせて総合的に検討すべき課題である。特に田中氏や土生田純之氏（2004）が指摘するように、5世紀後半以後では首長墓の系列が安定して継続することが知られているが、これは田中氏が指摘する親族関係の変化などと連動した変化である可能性が高い。さらに、前中期古墳の被葬者と後期古墳の被葬者を同様の「首長」として理解することが可能か（cf.大久保 2003）といった問題が挙げられる。親族関係の分析結果などからみても、前期から中期の状況は後期以降とは大きく異なっている可能性を認識しておく必要がある。（註³）こうした集団の具体相については5.（1）であらためて検討する。

また以下では鏡の入手・副葬に関わったと考えられる古墳被葬者とそれを含む上位階層について、上位層という表現を用いる。ここでいう上位層とは、古墳の被葬者として選ばれる集団の代表者を主に指しているが、あわせてそうした代表者を選出する上位の親族集団までを含めたものである。これは、古墳の動態からみた場合、鏡の保有主体は基本的に集団が単位であると想定されること（森下 1998a）、また上にも述べたように、1つの古墳に埋葬施設が複数存

在する事例や1つの埋葬施設に複数の被葬者が埋葬される場合が広く存在することが主たる理由である。すなわち、ここでいう上位層とは、集団の代表者となり得る上位階層という意味であり、古墳に葬られず箱式石棺や土壙墓などによる共同墓地に葬られかつ副葬品をもたない人々や、墓に埋葬されない人々を集団の一般成員として区別する。

古墳時代前期においては、ある突出した大型前方後円墳が旧国単位に相当するような領域の代表者として突出するような状況ではなく、同じような規模の古墳が各地域ごとに複数併存するようなあり方が一般的である。この時期における古墳築造の背後にある集団の実態については後論することとし、ここではまず各地域ごとの古墳の築造動向という観点から分析を行う。具体的には、各時期の古墳での副葬鏡の内容について空間的・時間的な差異を抽出し、その背景について検討する。また出土遺跡の年代を重視するという立場から、鏡の製作時期という視点ではなく、鏡の副葬時期という点に注目しつつ検討を行う。

(2) 対象地域と年代観

本稿では、玄界灘沿岸から周防灘沿岸地域、そして筑後川流域までを含む北部九州地域を中心とし、中九州の一部まで含めて対象とする。本地域における古墳の変遷の検討に際しては、柳沢一男氏（1995）・重藤輝行氏（1998）・久住猛雄氏（2002）らの研究を参考とした。ここで北部九州を取り上げることの利点は、これまでの研究で中心的であった鏡を配る側の視点ではなく、むしろ鏡を受領する側の視点から論を組み立てることによって、各地域社会における鏡の入手・副葬の意義を考えていくことができるとともに、それを通じて、結果として生み出された地域間関係の特質を明らかにすることが可能になると考えるためである。

分析対象は古墳時代前期の墳墓・遺跡であり、その年代観については、辻田（2006b）で示した前期古墳のⅠ～Ⅳ期の4期区分編年をもとに、主に舶載三角縁神獸鏡が副葬されるⅠ期・Ⅱ期を前期前半、仿製三角縁神獸鏡などの副葬が始まるⅢ・Ⅳ期を前期後半とする。

鏡の分類については、まず三角縁神獸鏡は「舶載」を大きくⅠ～Ⅲ段階、「仿製」を福永伸哉氏の分類（1994a）をもとに大きくⅠ～Ⅲ-b型式、Ⅳ・Ⅴ型式に区分する。舶載三角縁神獸鏡のⅢ段階が波文帯神獸鏡群にほぼ一致し、それ以前を大きく2段階に区分している。これは森下氏（1998b・2005a）によるA～C群と微細な差異があるものの、概ね一致するものである。古墳編年Ⅰ期の指標が舶載三角縁神獸鏡Ⅰ・Ⅱ段階であり、Ⅱ段階の副葬をⅠ期新相の指標とする。また古墳編年Ⅲ期の指標が仿製三角縁神獸鏡Ⅰ～Ⅲ-b型式であり、Ⅱ-b～Ⅲ型式の副葬をⅢ期新相の指標とする。Ⅳ・Ⅴ型式がⅣ期の指標である。

中国鏡〔後漢・魏晉鏡〕の分類については、基本的に樋口隆康氏（1979）・岡村秀典氏（1993）の分類を参照した辻田（2001）の鏡式分類をもとにするが、さらに車崎正彦氏（2002）による魏晉鏡の分類を加えて再構成している。倭製鏡については、森下章司氏（1991・2002）・林正憲氏（2000）・下垣仁志氏（2003a）らの分類案を参照した。年代観については、下垣氏の編年案を参考としつつ、筆者の鼈龍鏡系分類（辻田 2000）に一部修正を加え、筆者の鼈龍鏡系分類第1～2型式併行期を古段階、第3型式併行期以降を新段階として設定する（辻田 2006b）が、北部九州地域では倭製鏡の出土が少ないことから、補足的に用いることとする。

具体的な作業として、古墳時代前期前半と後半の各時期ごとに前期古墳からの出土が確実なものを中心に鏡の分布図を作成した。^(註4) その際、特に三角縁神獸鏡（〔舶載〕／〔仿製〕）・中国鏡（後漢・魏晉鏡）・倭製鏡の3つのカテゴリーを設定し、さらに中国鏡・倭製鏡については、倭製鏡の面径区分（辻田 2000）をもとに、便宜的に大きく小型（14cm以下）・中型（14.1～19.0cm）・大型（19.1～25.0cm）・超大型（25cm以上）の4つに区分した。

4. 分 析

(1) 古墳時代前期前半（図1）

ここでは各地域の様相について、前期前半と後半に分けて検討する。図1・2は古墳時代前期における各地の古墳での副葬状況を示したものである。

古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理

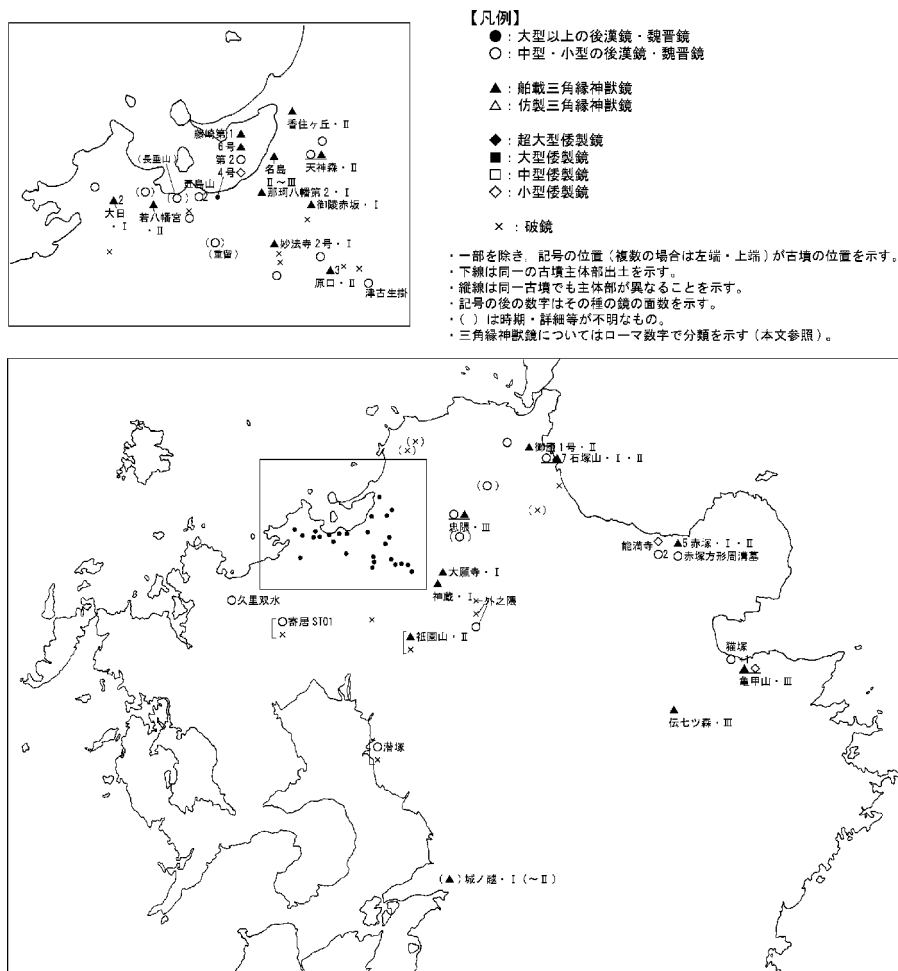


図1 北部九州における鏡副葬古墳の分布（前期前半）

古墳時代前期の北部九州で特徴的なのは船載三角縁神獸鏡の広範囲にわたる分布と魏晉鏡の副葬である。まず古墳時代前期前半の各地域について、特に鏡の年代観と古墳の年代観がある程度一致する三角縁神獸鏡に注目しつつ西から順にみていくと、まず唐津平野周辺では90m級の前方後円墳である久里双水古墳で小型の盤龍鏡1面が副葬されているが、現在のところ周辺では三角縁神獸

古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理

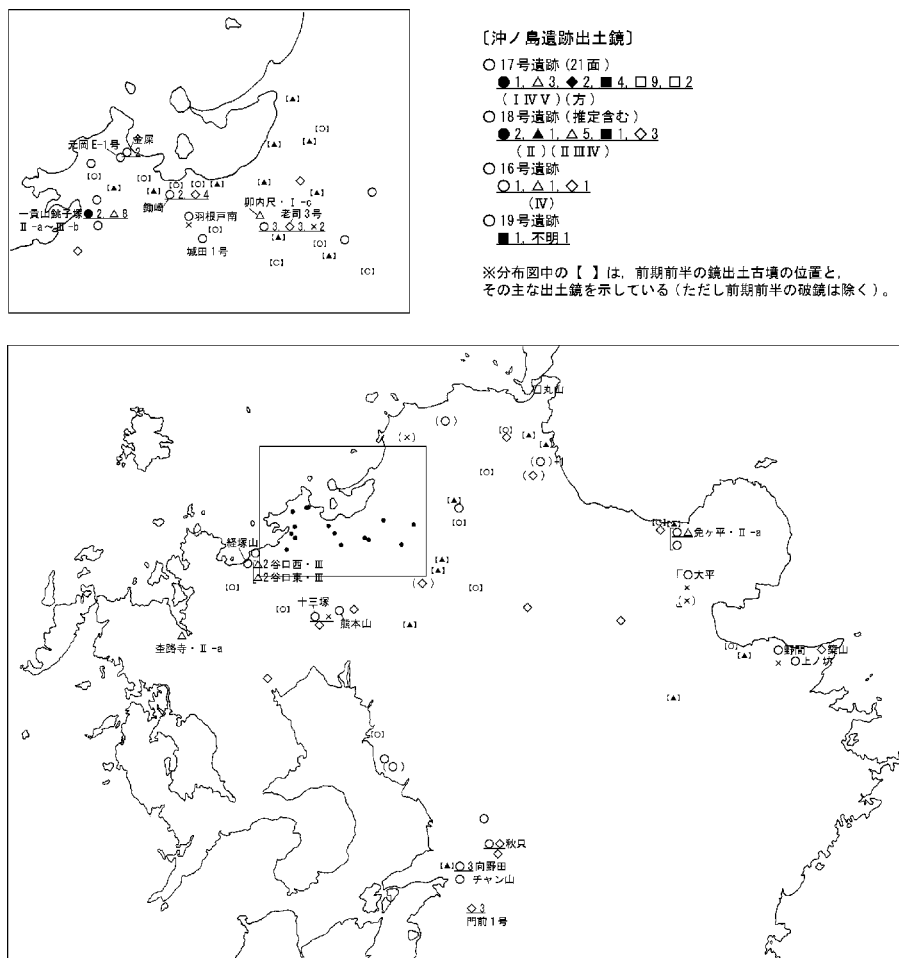


図2 北部九州における鏡副葬古墳の分布(前期後半～末)

鏡の副葬はみられない。糸島地域は前方後円墳の密集度が高い地域であるが、埋葬施設や鏡の内容が判明していない古墳も多く、詳細については今後の課題である。現状では泊大日古墳(墳形等不明)で舶載三角縁神獸鏡第I段階(表現①)の出土が伝えられる他、小型の魏晋鏡の出土が多い。福岡平野周辺は、舶載三角縁神獸鏡が多く出土している。特に、那珂八幡古墳の第二主体出土鏡

(第Ⅰ段階・表現⑥)、若八幡宮古墳出土鏡(第Ⅱ段階・表現③J、〔図3-1〕)などをはじめ、第Ⅰ・第Ⅱ段階の製品が主体であり、第Ⅲ段階の波文帯鏡群の出土が現状では認められない。またこれは筑後川中流域の祇園山古墳(方墳)や神蔵古墳などでも同様である。こうした状況は、特に前期前半でもⅠ期の段階に近畿との接触がより密であったことを示すと考えることができよう。対照的に、遠賀川中流域では忠隈古墳で舶載三角縁神獸鏡第Ⅲ段階(表現⑩)が出土している。

周防灘沿岸地域では、石塚山古墳で鏡14面の出土が伝えられ、細線式獸帯鏡の内区片が出土している他、舶載三角縁神獸鏡第Ⅰ段階・第Ⅱ段階が計7面現存する。また宇佐地域では川部・高森古墳群の赤塚古墳で舶載三角縁神獸鏡が5面(第Ⅰ・第Ⅱ段階)副葬されている。別府湾沿岸地域では亀甲山古墳で舶載三角縁神獸鏡(第Ⅲ段階)が出土しており、また大野川上流域では七ツ森古墳群(伝)出土の舶載三角縁神獸鏡(第Ⅲ段階)がある。

以上の状況をもとに、前期前半の北部九州における鏡副葬の特質について検討する。福岡平野周辺において同一古墳で副葬面数が最も多いのは原口古墳の3面である。また三角縁神獸鏡は前方後円墳に限らず、藤崎遺跡や大願寺遺跡の方形周溝墓などからも出土しているが、同一墓域内ではより中心的な墓に三角縁神獸鏡が、箱式石棺墓などさらに下位に位置する埋葬施設にはより小型の中国鏡などが副葬されるといった階層性が認められる。ただし、大願寺方形周溝墓に近在する前方後円墳の神蔵古墳において三角縁神獸鏡が副葬されている事実は、方形周溝墓と前方後円墳の被葬者が、必ずしも階層的に隔絶したものではなく、両者が上位層として緩やかに共存していた可能性を想定させる。

その一方で、三角縁神獸鏡を副葬しない地域や古墳が多数存在する点が重要である。前期前半段階で三角縁神獸鏡が副葬されているのは、福岡平野から筑後川中流域、遠賀川中流域の忠隈古墳、周防灘沿岸部の石塚山古墳、宇佐地域の赤塚古墳、別府湾沿岸から大野川上流域などであり、唐津湾沿岸地域や佐賀平野などでは現在のところ出土が認められない。特に、後者においても唐津平野などでは90m規模の前方後円墳が築造されており、かつ小型の中国鏡が副葬さ

れていることから、こうした地域は三角縁神獸鏡の分布という点からみた場合には周辺域として存在することがわかる。また上記のいずれの地域においても、倭製鏡古段階で中型以上の製品が現在のところ出土していない点も特徴といえよう。

(2) 古墳時代前期後半 (図2)

次に前期後半の様相をみると、前期前半において舶載三角縁神獸鏡が副葬された地域にその後も継続して新しい鏡が副葬されているかという点必ずしもそうではない。例えば福岡平野周辺部では仿製三角縁神獸鏡の副葬は卯内尺古墳にほぼ限定されている。また倭製鏡の副葬が一部で認められるが、小型鏡が中心であり、前期前半同様中型鏡以上の副葬は殆どみられない。新段階の製品の出土自体も多くはなく、方格T字鏡などの小型の魏晋鏡の副葬が増加する。周防灘沿岸地域や別府湾沿岸地域などでも宇佐地域の川部・高森古墳群(免ヶ平古墳)での出土を除くと、仿製三角縁神獸鏡は出土せず、小型の倭製鏡や魏晋鏡の副葬が主体となっている。筑後川中流域とその周辺では、前期後半には鏡の出土は減少する。

こうした点からみて興味深いのが糸島地域以西の状況である。糸島地域ではⅢ期に全長103mの一貴山銚子塚古墳が築かれ、方格規矩四神鏡1面と四葉座内行花文鏡1面、仿製三角縁神獸鏡8面が副葬される。方格規矩四神鏡と内行花文鏡はいずれも大型鏡である。これは副葬状態や文様の「摩滅」などから従来「伝世鏡」の具体例として示されてきた事例であるが、筆者は先に述べた完形後漢鏡・魏晋鏡や破鏡の流通形態に関する分析結果(辻田 2001・2005a)などから、これらの大型後漢鏡2面は、古墳時代になって近畿地方に流入した後、仿製三角縁神獸鏡とともにこの段階で一括してもたらされた可能性を想定している。全長103mという墳丘規模は、仿製三角縁神獸鏡8面ではなく、この大型後漢鏡に相応なものと考える。また唐津湾周辺では谷口古墳で仿製三角縁神獸鏡が、伊万里市域の奎路寺古墳で同じく仿製三角縁神獸鏡が副葬される。すなわち、北部九州地域においてはまず前期前半段階に舶載三角縁神獸鏡が各地の

古墳で副葬されるが、どの地域においても複数世代にわたり安定的に三角縁神獣鏡の入手が継続したわけではなく、対照的に仿製三角縁神獣鏡は糸島地域以西といった、それ以前に舶載三角縁神獣鏡の副葬がみられなかった地域で副葬されるようになるのである。このことは、三角縁神獣鏡の分布域の拡大を示すというよりは、むしろ前期前半と前期後半において、三角縁神獣鏡が主として配布された地域あるいは集団が異なっていた場合が多く含まれている可能性を示していると考ええる。

また先に述べた、前期後半段階の免ヶ平古墳で仿製三角縁神獣鏡の副葬が認められる宇佐地域の川部・高森古墳群では、前期前半の赤塚古墳における舶載三角縁神獣鏡の副葬以後も継続的に三角縁神獣鏡が入手されていることが読み取れる。これは、集団としての系譜がどの程度連続的であるかは別にしても、少なくとも前期後半段階で新たに仿製三角縁神獣鏡を入手したという点では、上位層による各世代ごとの近畿との接触を示すものといえよう。

その他に注目される事例として、福岡県老司古墳3号石室からは、三角縁神獣鏡の外区片が出土している。本鏡片は、穿孔が施された懸垂鏡片であり、現在のところ三角縁神獣鏡の中で唯一の破鏡である(辻田 2005a)。文様は表現①であり、付近では那珂八幡古墳で表現⑥の三角縁神獣鏡が出土していることから、I期の段階にこの地域に流入し、破鏡として加工された後、前期末に副葬されるまで当地にて伝世された可能性が高い。また近接する卯内尺古墳において仿製三角縁神獣鏡(福永 I-c 型式)が副葬されていることから、前期後半段階で近畿との交渉が行われたことがわかる。老司古墳出土の三角縁神獣鏡の破鏡は、そうした上位層による各世代ごとの鏡の入手と併行して、第一世代において入手された鏡が形を変えて伝世された事例ということができるだろう。

こうした北部九州の状況をみた場合に、特に前期後半以降で特徴的なのが、沖ノ島遺跡における大型・超大型倭製鏡の出土である(図2右上)。ここでは北部九州において沖ノ島遺跡で出土するような超大型鏡などが殆どみられないこと、大型鏡についても非常に限定されることを確認しておきたい。

中期前半になると上述のような状況はさらに一変する。ここでは図示してい

ないが、前期に前方後円墳の築造が活発であった地域の多くでは古墳の築造が停止し、築造される場合でも円墳などの小規模墳が主体となる。小型鏡の副葬が中心であるが、鏡が副葬されない地域も多い。逆にこの時期に古墳の築造が活発化するのが筑後川中流域、八女地域、宗像地域などである。これは列島規模での古墳の築造系列の変動(都出 1988)と密接に関わる動きと理解されよう。

そうした中で注目されるのが、今宿地域の丸隈山古墳である。中期前葉において、倭製鏡新段階の大型鏡・中型鏡^(註5)を各1面ずつ、また巴形銅器などをあわせて副葬している。この倭製鏡2面がどの段階でもたらされたものか不明であるが、いずれにしても大型の倭製鏡は、沖ノ島遺跡を除くと北部九州では前期を通じても希有な存在であり、また先行する鋤崎古墳などでも三角縁神獸鏡が認められないことから、この今宿地域の集団は他の地域とは異なる位置付けがなされていた可能性が高いと考える。この中型以上の倭製鏡の「在/不在」が地域差となって現れる現象は、山口県など他地域でも認められるものであり(車崎 1993; 辻田 2005b)、各地域の消長やヤマト政権の配布戦略を考える上で一定の指標となる可能性が高いことをここで確認しておきたい。

(3) 福岡市西部～前原市周辺の魏晉鏡

福岡市西部の早良平野から前原市周辺にかけての地域では、古墳時代前期の遺跡から魏晉鏡が比較的多く出土している。ここではその一部について例示する(図3-2～6)。重留石棺出土の鳥文鏡〔2〕は直径14cmで、長方形鈕孔を有する。外区に複合鋸齒文を持ち、内区には7個の珠文を配し、その間に鳥文を配する(森・佐野 1968)。渤海湾周辺での出土が指摘されている一群であり、列島内での類例も一定数みられる(福永・森下 2000; 車崎 2002; 森下 2006)。長垂山石棺からは方格規矩鏡の倣古鏡〔3〕(径12.5cm)が出土している(九州考古学会 1950)。金武遺跡群の城田1号墳から出土した獸帯鏡〔4〕は、直径11.7cmで内区に5個の珠文とその間に鳥文や変形した玄武を配する(福岡市教委 2005b; 福永 2005)。その他、この地域では方格T字鏡が3面出土している(元岡E-1号墳〔5〕(福岡市教委 2005a)、立石1号墳、東真方C-1号墳(前

原市教委 1995)。また羽根戸南古墳群G 2号墳から出土した双頭龍文鏡〔6〕(福岡市教委 2001)は、西村俊範氏(1983)の分類でいうⅢ式であるが、鏡背面から浮いた位置に長方形鈕孔を持つ点から、魏晉鏡の範疇に含まれる(cf.森下 2006)。他に、図示していないが元岡・桑原遺跡群の金屎1号墳からは、菱雲文鏡(径13.2cm)と芝草文鏡(径11.6cm)とが1面ずつ出土する(福岡市教委 2006)。

このように、玄界灘沿岸部においても、従来伝世鏡とされてきた、前期古墳から出土する漢式鏡の中に、実際には魏晉鏡が多く含まれており、かつそれらが古墳時代前期以降に列島に流入したものであるという点は、この地域の古墳時代開始過程を考えると殊に重要な意味を持つ。すなわち、弥生時代後期において完形中国鏡の副葬が多いこの地域においてもまた、列島の他地域と同様に、古墳時代前期において、中国鏡の流通形態がそれまでと比べて大きく変化した可能性が認められるのである。そしてこうした弥生時代的な鏡の流通形態とは不連続な魏晉鏡の動きは、三角縁神獸鏡の配布やそれに続く倭製鏡の配布と連動したものである可能性が高いといえよう。

(4) 分析結果のまとめとモデル化

以上古墳時代前期の北部九州における鏡の副葬状況について検討してきた。その結果として、前期の早い時期に舶載三角縁神獸鏡を複数副葬するような地域ではそれ以降に古墳の築造が継続しない場合が多いこと、また前期において鏡の副葬が顕著な地域では、主立った前方後円墳の築造が前期末から中期前葉をもってほぼ終了していることなどが指摘できる。また前期を通じて小型の中国鏡の副葬が基本であり、大型・中型の倭製鏡の副葬が非常に限定されるという点は、北部九州の特徴的なあり方であると考えられる。

このような鏡の動態について、ヤマト政権による鏡の配布という観点からみるならば、ここでみたような舶載・仿製三角縁神獸鏡の出土地域の差異や中型・大型倭製鏡の限定性といった現象は、配布主体としてのヤマト政権側の配布戦略・論理の所産とみることが可能である。北部九州の場合は、こうした後漢鏡・

古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理

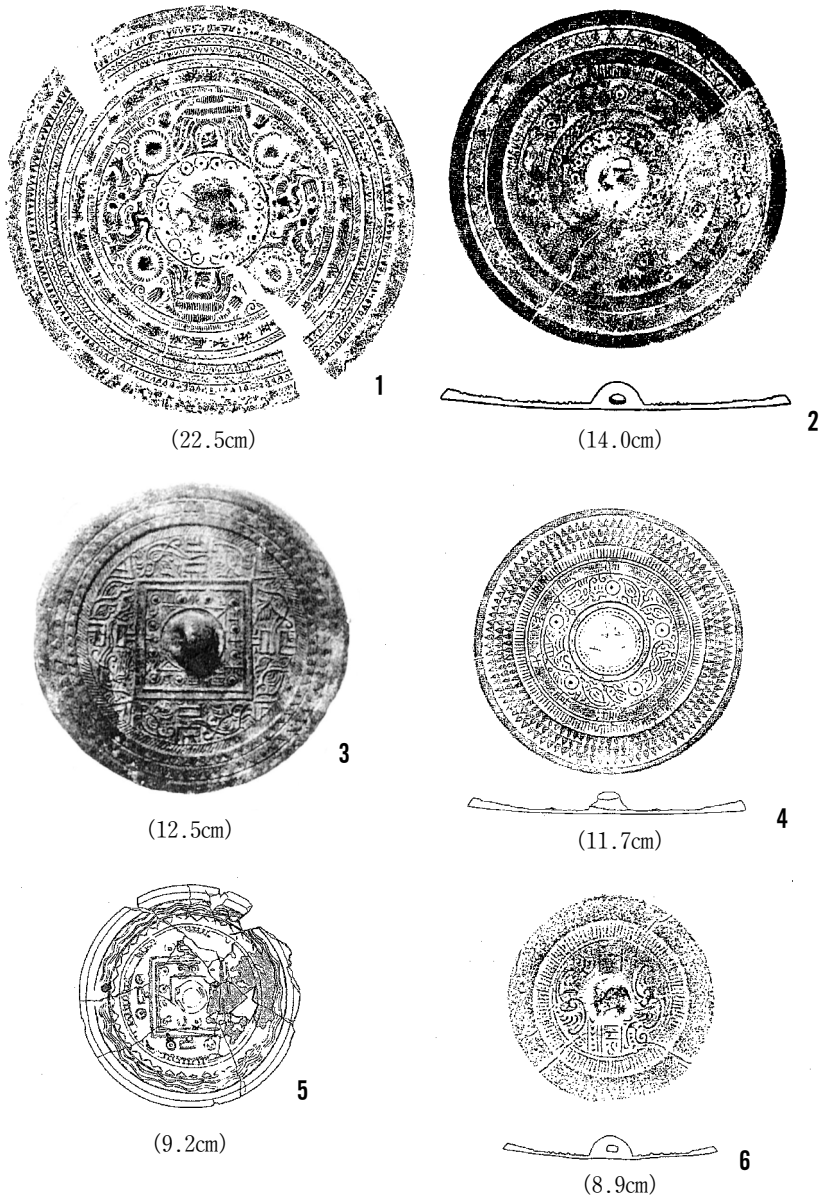


図3 福岡市西部～前原市周辺における三角縁神獸鏡・魏晉鏡の具体例
(1は約1/4、2～6は約1/3)

魏晋鏡・倭製鏡のいずれにおいても基本的には小型鏡を配布するという戦略が採られており、その中の一部の集団に対して大型の倭製鏡や複数の三角縁神獸鏡がもたらされたと考える。

そして古墳の築造動向という点からみると、当該時期の北部九州では、前期を通じて主導的な地位にある安定した集団あるいは古墳の築造系列などを抽出することは困難であり、そこを中心とした鏡の二次的・間接的な配布を想定することは必ずしもできない。例えば従来福岡県苅田町の石塚山古墳が墳丘規模130m級、副葬鏡数14面という点から当該期の北部九州の盟主的な位置付けがなされることが多かったが、石塚山古墳以後大型古墳の築造が継続せず、また埋葬施設などの他の要素を含めた場合でも、玄界灘沿岸の諸地域に対しての主導的な影響力は認められない。これは仿製三角縁神獸鏡が多数出土する一貴山鋤子塚古墳についても同様である。古墳の規模において相対的な差は存在するものの、各集団間の関係は、在地におけるそのときどきの同列的な競合関係という性格がつかったものと想定する。地域によって古墳の築造の継続と断絶に差がみられるのも、こうした点に起因するものとする。

このようにみた場合、ヤマト政権による鏡の配布は、各集団に対して複数世代にわたり安定的に継続して行われるというよりは、各地の上位層に対して散発的に行われることが一般的であった可能性が高い。そしてそこにおいて取り結ばれたヤマト政権との関係性自体が、在地における集団間相互の関係等に一定の影響を与えているものとする。ただし、径10mほどの小規模な低墳丘墓や箱式石棺の集団墓などにおいて小型の倭製鏡1面を副葬するような場合は、在地のより上位の階層との結びつきによって入手した可能性を想定する必要がある。

以上の北部九州の事例をもとに、ヤマト政権から各地への鏡の配布の在り方を考えると、以下のようなモデル化が可能であるとする。

まず集団ごとの入手・副葬（時間軸上の問題）について考えた場合、大きく次の2つに分類することができる。

A類：各世代ごとの入手・副葬—(古墳の築造の時期差と副葬品の時期差が対応する場合)

B類：各集団内における世代間での管理・継承後の副葬；「伝世」(森下 1998a)

またこのA類・B類に対して副次的なモデルであるが、同時期における各地の上位層による鏡の入手・使用・消費の問題について考えた場合、理念型としては次の2つのあり方が設定できる。

(a)：各地の上位層それぞれに対する直接的な配布及び副葬

(一次的配布の後そのまま鏡が副葬されたと想定される場合)

(b)：第1世代で配布された鏡群を同時期の上位層同士の間で「分有」

(一次的配布の後、二次的な鏡の授受が行われたと想定される場合)

b 1：平野単位ほどの地域内での「分有」

b 2：平野単位を越えた地域の上位層同士での「分有」

まず各集団における鏡の入手・副葬形態について検討する。前期古墳で最も一般的に認められるのが、A類とした各世代ごとの入手・副葬である。研究史でみたように、古墳から出土する副葬品の年代は古墳の年代の指標となる場合が多く、このことは各地の上位層によるヤマト政権との接触あるいは政治的諸関係の設定が、代替わりごと、各世代ごとに行われた可能性と、さらにはそうした結びつきや権力基盤の脆弱さを示していると考えられる(都出 1970：pp. 65～69；近藤 1983)。この場合には、様々な財の入手・副葬自体が、上位層の世代交代と密接に関わっている可能性が想定される。ここで検討した中での典型例としては、同一古墳群では宇佐地域の川部・高森古墳群の事例が挙げられ、また小平野規模の例でいえば福岡平野の那珂八幡古墳・卯内尺古墳における舶載・仿製三角縁神獣鏡の例が挙げられる。またこのように古墳の築造が時期的に連続する場合に限らず、古墳の築造や鏡の副葬が単発的で前後の時期に連続しない事例の多くが、このA類に該当すると考えられる。

その一方で、古墳時代においては年代的に古い鏡がより新しい時期の古墳に副葬される事例も非常に多く、これらは古墳被葬者の帰属集団を保有の単位として、複数世代にわたって管理・継承された可能性が高い（森下 1998a）。これをB類とするが、A類と対比すると、このB類の場合においては第一世代で入手された鏡の管理・継承が、上位層の世代交代を正当化するイデオロギー装置として作用した可能性が考えられる。ここでいう管理には、古墳の葬送儀礼における副葬行為も含めて考えるべきであろう。北部九州での具体例としては、先に挙げた老司古墳出土舶載三角縁神獸鏡の破鏡や、同じ老司古墳や今宿地域の鋤崎古墳などで、横穴式石室内の複数の被葬者それぞれに対して別の鏡が副葬されている事例、また同一古墳において複数の埋葬施設がある場合に、それぞれに別の鏡が副葬される事例の一部がこのB類に該当すると考えられる。ただし、これは出土鏡の製作時期に時期差が認められない場合が基本であり、例えば京都府寺戸大塚古墳のように後円部竪穴式石槨からは舶載三角縁神獸鏡が出土し、前方部の竪穴式石槨からは仿製三角縁神獸鏡と倭製鏡（方格規矩四神鏡系・新段階）が出土するような場合は、むしろA類の各世代ごとの入手とみるべきである。このように、このA類とB類の両者は排他的なものではなく、鏡副葬の2つの側面として併存していたというのが実態であったと考えられる。このA類とB類については、古墳の年代と副葬品の年代とを相互につきあわせることによって検証が可能である点が重要である。

また同時期の上位層同士の関係について考えると、各地の上位層に直接的に分配された後、そのまま副葬される場合と、一次的配布後に二次的に鏡の授受が行われる場合の2つのパターンが理念型としては措定可能である。ここでは前者を仮に(a)、後者を(b)としておく。鏡の入手形態が先に挙げた「参向型」を基本とするとみた場合、地域ごとあるいは古墳築造系列ごとの鏡の違いは、各集団が鏡を直接的に入手する際に選択的な配布を受けた可能性を考えることができよう。またこの場合の選択的配布とは、他の集団に対する牽制という意味合いをも多分にあわせ持つものと考えられる。特に前期後半以降においては仿製三角縁神獸鏡や大型倭製鏡の出土地域が相互に排他的、あるいはそれぞれに

限定的である場合が広く認められることなどから、この(a)としたような、直接的配布後にそのまま副葬される事例が一般的であったものと想定する。

他方、(b)のように二次的な鏡の授受を想定する場合、平野単位ほどの地域内で「分有」する場合と、平野単位を越えた地域同士で「分有」する場合の2つのパターンが可能性としては存在する。前者をb 1、後者をb 2とする。ここでいう(b)は、従来三角縁神獣鏡の「配布」について語る際に顕著に認められた「上位→下位」の配布ないし「下賜」というイメージではなく、古墳被葬者間の関係が相互にほぼ同列の場合を想定したものである。b 1の具体例としては、上では触れなかったが福岡平野東部の名島古墳・香住ヶ丘古墳・天神森古墳の舶載三角縁神獣鏡各1面(第II段階^(註6))、あるいは筑後川中流域の神蔵古墳と大願寺方形周溝墓の舶載三角縁神獣鏡各1面(いずれも第I段階)などを想定する(ただしこれらは実際には同一集団の分派である可能性もあることから、広い意味では(a)に包括されるものである)。問題は、ここでb 2としたような、小平野単位ほどの地域を越えた地域同士の間での「共有」が実際に行われたかどうかである。小林行雄氏(1961)による三角縁神獣鏡の同範鏡分有関係の分析は、まさにこの問題と深く関わっている(e.g.石塚山古墳と赤塚古墳、一貴山銚子塚古墳と谷口古墳など)。ただしこうした鏡の二次的授受は、実際には鏡の一次的な入手時期さえ同じであれば、鏡の種類・製作時期や副葬時期、古墳の時期が異なっても起こりうる。したがって、鏡の種類・製作時期・副葬時期・古墳の時期などが相互に近接している場合に、可能性の1つとして挙げることはできるが、それ以上の可能性の絞り込みや検証は困難である。したがってここでのモデル化も、あくまで理想型としての措定にとどめざるを得ないと考えらる。

以上、北部九州各地域の動向について検討を行うとともに、各事例をもとに鏡の入手・副葬の在り方に関する分類を行った。以下では、ここまでの分析結果をもとに、鏡の入手・副葬の過程における在地社会の論理とその背景について検討することにしたい。

5. 考察：古墳被葬者の世代交代と葬送儀礼における鏡副葬の意義

(1) 古墳被葬者の帰属集団とその具体相

ここまで、古墳築造の背後に存在する集団の実態について、その実態を深く吟味することなく議論を進めてきた。ここでその具体的な内容について若干検討しておきたい。

ある地域内で時期的に連続して古墳が築かれる状況について、本論では集団の代表者としての古墳被葬者とそれを含む上位層の世代交代との関連において検討を行ってきた。この場合、古墳の築造に関わるのは、古墳に埋葬されるような人物を代表者とした集団単位として理解される。その具体像については、先行研究においては例えば近藤義郎氏によって複数の「氏族」間の紐帯関係を包括する「部族」といった表現が使用されている（近藤 1983）。この問題を考える上では古墳の分布などに加え、被葬者自体の問題が重要となる。

研究史でも挙げたように、田中良之氏は、出土人骨による古墳被葬者の親族関係の分析から、古墳時代前半期においては、弥生時代以来の双系的な親族関係を基盤として、古墳被葬者層の世代間継承は未だ不安定な側面をつよく残していた可能性を指摘している（田中 1995・2000・2003・2004）。ここまでみてきた鏡の入手・副葬のあり方は、こうした親族関係の具体的なイメージと一致するものである。また集団単位という場合でも、例えば福岡県老司古墳のように複数の横穴式石室が同一の前方後円墳に存在する場合があります、この事例では集団の代表を1つの世帯に絞り込み切れていないという見方が示されている（田中 2003・2006）。これは古墳被葬者を代表者とする集団単位とはいいいながら、その上位層においては複数世帯を含み込むような緩やかな紐帯において結ばれた親族集団ということができよう。すなわち、各時期の「集団」あるいは集団単位の実態とは、双系的親族関係を背景として、上位層の世代交代、代替わりごとにそのつど更新されるものであったと考えられる。したがって、各時期ごとに集団の範囲・規模・内部での系列化のあり方も異なっていたと考えられ、であるが故に集団の単位自体も不安定で流動的なものであったと考えられる。

この意味において、少なくとも前期段階での「古墳の連続的な築造のパターン」は、そのままある単一の「集団」を示すわけではなく、またその中身についても固定的で実体的なものであったとは考えられない。むしろその実態としては、上位層の代替わりごとに、親族集団内において複数の候補者が存在し、緩やかに裾ひろがりに継承され、各世代ごとにそのつながりや範囲が再形成されるといったあり方を想定する。このようなモデルをもとに、以下議論を進める。

(2) 上位層の世代交代におけるイデオロギー装置としての鏡

まず考古学的現象として再度確認しておきたいのは、鏡が世代間で管理・伝世・継承されるB類のような場合を除き、多くの場合において、副葬鏡群は時期差を示すほどあるまとまりをもって副葬されているという点である。これは、被葬者各世代において新たに鏡が配布された可能性と、その被葬者の死に伴って、ほぼ全てが副葬に供された可能性とを示すものである。ここではこれをA類とした。

その一方で、B類のように一部を被葬者の葬送儀礼において副葬に供すものの、残りは次世代へと管理・継承するような場合もある。前期を通じてみられるこのような状況は、同範鏡論・伝世鏡論において小林行雄氏が提示したような、舶載三角縁神獸鏡の配布＝ヤマト政権による「首長権」の外的承認によって（男子）世襲制が確立し、それ故伝世鏡が副葬されるといったモデル（小林1955）とは異なり、ここまでみたように、「首長権」の世代間継承が三角縁神獸鏡の配布以降も不安定であったことを示唆している。このような鏡の使用の在り方は、どのような社会的状況を意味するものであろうか。それを考える上で問題となるのは、鏡が最終的に副葬／廃棄された「場 (locale)」、すなわち古墳上における葬送儀礼自体がどのような性格のものであるかという点である。前期古墳の葬送儀礼は、共同体的側面を伴った首長権継承儀礼の色彩が濃いことが早くから指摘されている（近藤 1966a；近藤・春成 1967）。首長権継承儀礼という概念自体については近年批判も多いが、古墳で行われた葬送儀礼が、前代の集団の代表者もしくはその親族を被葬者とする葬送儀礼であり、遺された

集団成員たちにより遂行されたである可能性は高いといえる。こうした葬送儀礼の場における鏡の副葬を考える上で重要なのは、被葬者の死によってどのような秩序が再確認され、その上でどのような秩序が形成されるのか、またそこにおいてどのような社会的諸関係が再生産されていくのかという問題である。葬送儀礼を執行するのはあくまでその段階で生きている人間である。その場合、葬送儀礼及びそれが執行される「場」とそこに含まれる物質的環境全体は、次世代への「首長」権継承に際して、それに参加する彼／彼女ら自身によってイデオロギー的に動員される象徴的資源 (cf. Giddens, 1979) であると同時に、これらの諸資源は、日常的な社会的実践の場において経験される秩序を、それに参与する人々が再確認する上での主体化の権力装置である (cf. Barrett, 1988b; 溝口 1993a)。そうであるとするならば、最終的には副葬に供される鏡は、どの段階で古墳被葬者に属するものとなるのであろうか。これについては、死後にその功績を讃えて贈与されるようなことを想定することもできるが、ここまでみたように、鏡が基本的には古墳被葬者の葬送儀礼において一括して副葬され失われると考えられることから、筆者はこれを古墳被葬者各世代ごとの保有・所属と捉え、新しく集団の代表者になった人物は、集団成員に対する自らの位置付けを正当化するために新たに鏡を求めるという在り方を想定する。これは春成秀爾氏 (1984) によるモデルでいえば(4)に近い。このような形で各地の集団の新たな代表者は鏡を求めてヤマト政権に貢納 (tribute) を行い、配布主体としてのヤマト政権は地方の新古墳被葬者に対し鏡を「配布」する。ここにおいては、ヤマト政権中枢の配布主体が鏡の内容等に関して一定の決定権をもち、被配布者は受動的な位置にある。ここで各地にもたらされる鏡をはじめとした諸製品は、それ自体がヤマト政権との関係を表象する物質文化として意味づけられる。このような形でのヤマト政権と各地の上位層との需要—供給の関係・広域的な地域間の相互作用こそが、古墳時代前期初頭段階に成立し、その後の古墳時代的地域間関係を決定づけた政治支配システムの枠組みの実態であると考えられる。こうした需要—供給という形での相互作用の過程において、鏡をはじめとした種々の製品は、各地における葬送儀礼を含む様々な儀礼行為

の場において動員されるべき、不可欠な品目として組み込まれるようになる。この過程で成立したヤマト政権と地方という相互の関係は、財の流通を媒介とした中心—周辺関係の様相を導出する。こうしたあり方は、威信財システム (prestige good systems: Friedman and Rowlands, 1977) の一類型として理解することができる。筆者はこれを古墳時代前期威信財システム／求心型競合関係モデルと呼んでいる (辻田 2001・2005a・2006a)。ここにおいて鏡等の諸製品は、上位層同士の間での階層的序列関係をも包括する地域間相互の関係を再生産及び再編成する上で動員された威信財 (prestige goods) として理解される。

また以上のように捉えるならば、各地の上位層がヤマト政権主導の威信財システムに自ら組み込まれていったのは、世代交代を契機とした各集団内部での上位層と集団成員間の矛盾・利害対立の進展という点のみならず、他の集団との利害関係という点から、上位層自身によって戦略的に行われたためであると考えることができる。ここでいう集団間の利害関係とは、その地域の主導権をどの集団単位が掌握するかといった意味での競合関係等を含むものである。そしてそれに対してどのような対応を行うかはヤマト政権側の論理に委ねられる。ここにおいて、配布主体であるヤマト政権は、こうした威信財システムの需要—供給の関係を利用して、各地域における集団間の競合関係に関与することができる。これによって、各地域社会内部における社会秩序はヤマト政権の論理が一部付加されることになる。

この広域的な政治的同盟関係は、各世代においてそのつど取り結ばれた、各地の上位層とヤマト政権の上位層との間での点的な直接的人格的关系を基礎とする。その意味では上に述べたような中心—周辺関係の様相についても、この段階では表層的で不安定な側面をつよく有していたと考えられ、威信財の分布範囲の内側が全て面的な政治支配領域ではない点に注意する必要がある (辻田 2006a)。そしてこのような地域間関係が、威信財システムという形で構造化されることによって、結果的に中心と周辺という関係が古墳時代前期～中期を通じて自然化されていったものと考えられる。

この過程において、前述の威信財システムの結果として、ヤマト政権と各地の上位層との関係がそのつど更新・再確認されると同時に、ヤマト政権との関係において、各地域社会内部での集団間の関係やそれぞれの位置付けもまた再編成されたものと想定される。このように、「配布される側の論理」と「配布する側の論理」との相互作用が、結果としてこのような威信財システムを維持し、また再生産する上で貢献したものと考える。前期末から中期前半における古墳築造系列の継続と断絶とが列島規模で連動しているのは、古墳時代前期を通じて形成されたこうした列島規模での威信財システムの特質による点が大きいといえよう。

6. 結論：北部九州における古墳時代の開始と威信財システム

本稿では、古墳時代前期の北部九州における鏡の副葬動向の検討を通じて、鏡の配布・伝世に関するモデル化とその論理について議論を行ってきた。最後に、広域的威信財システムという観点から、「中心」としてのヤマト政権と「周辺」との関係、さらに北部九州における古墳時代の開始の問題をどのように捉えることができるかについて述べ、まとめとしたい。

ここまでみたように、広域的威信財システムを作動・維持させる主たる原動力の1つとして、各地における古墳被葬者層の世代交代を挙げることができる。この意味では、古墳時代前期におけるヤマト政権と各地との関係は、「ヤマト政権から各地へ」という放射型のベクトルで成立していたというよりは、むしろ「各地域社会からヤマト政権へ」という求心型のベクトルで方向付けられるものであったと理解する。これは、北條芳隆氏が指摘するような、古墳の出現に関する求心集約型モデルとも論点として重なる問題であろう（北條 2000 b）。そしてこうした周辺地域からの求心的なベクトルが、結果的にヤマト政権の急速な「実体化」と「中心化」を促進し、上に述べたようなセンターとしてのヤマト政権の成熟化をもたらしたものと捉える。

ただし、注意しなければならないのは各地域の空間的位置や人口の問題である。本論は北部九州まで含めた広域的地域間関係の問題を扱ってきたが、近畿

を中心とした場合、例えば東部瀬戸内地域の上位層とヤマト政権の上位層との結びつきは、その空間的距離やそれによる日常的接触の頻度などにより、北部九州の上位層との関係とはレベル差が存在する可能性が高い。こうした地域的な差異がどの程度質的に意味をもつかについても今後検討する必要がある。

このような論点をふまえつつ考えた場合、北部九州における前方後円墳の出現は、在地の上位層が相互に牽制・競合しつつ、西日本を中心とした上位層のネットワークの中に積極的に参画し、新たに創出された墓制・儀礼行為を戦略的に導入した結果と考えることができよう。これは、古墳時代開始期における土器相の変化が、北部九州内部でも面的なものではなく跛行的に進行するという指摘（溝口 1988）とも整合的である。そして、上位層の世代交代が進行する中で、そのつどヤマト政権との政治的關係が更新され、かつ北部九州内部での集団同士の関係もまたその度ごとに再編されたと考えられる。墳丘規模などでは相対的な差がみられるが、埋葬施設の地域性と階層性における在地的秩序の様相からみても、基本的には特定地域の上位層が北部九州全域にわたり主導権を握るような状況ではなく、同列的な集団間關係が競合的に進行したと考える。そして、前期末において完形鏡の分配が終了し、鉄製甲冑類などを主体とする中期的威信財システムへと更新されたこととほぼ連動する形で、前期における各地の中心的な古墳群は築造を終了し、宗像地域をはじめとして新たな古墳群の築造が開始されたと捉える。

以上、古墳時代前期の鏡の配布と伝世の論理の問題について、周辺域の観点から検討を行ってきた。本稿ではあえて3世紀後半～4世紀代における対外交渉の変化やそれに伴う列島内部での変化という問題についてふれておらず、前期を通じてみられる上位層の世代交代と広域的地域間關係の相互の關係性に論点を絞って議論を行った。こうした対外交渉の変化との關係については稿を改めて論じたい。この点において、北部九州地域は、大陸・半島への門戸としての側面をもつよく示しており、また中期以後においては、より独自性の高い古墳文化が展開した地域として、改めて注目すべき地域であると考え。沖ノ島遺跡の動向なども含め、中期以降の問題については課題とするが、古墳時代に

における広域的・地域間関係の実態解明における本地域の重要性を再度確認しつつ、攔筆したい^(註7)。

【註】

註1：この他、各地の上位層が鏡を各地に献上したとする横田健一氏の説(1958)や、倭製鏡のモデルとしての漢式鏡がヤマト政権にもたらされた後、それを模倣した倭製鏡が再度各地の上位層にモデルとなった漢式鏡とともに各地の上位層に分配されるという下垣仁志氏の吸収―再分配モデル(2005)などがある。筆者はいずれの立場とも異なり、各地の上位層からヤマト政権に鏡がもたらされたという考え方は採っていない。

註2：森岡秀人氏(1994・2006)、小山田宏一氏(1994)、寺澤 薫氏(2005)らの議論は筆者の意見とも重なる点が多いが、「漢鏡〇期」という表現を併用して古墳時代開始期の鏡の段階的変遷を論ずるため、鏡の製作年代と列島への流入、列島での流通年代の違いを読みとることが難しくなっていると考える。

註3：前期のような双系社会的様相をも説明する上でよりニュートラルな表現としては、大久保徹也氏(2006)が指摘する、「連鎖的築造パターン」などが挙げられよう。

註4：ただしここに示したのはあくまで鏡が出土した古墳の分布であって、糸島地域をはじめ、内容が判明していない前期古墳は本地域内でも非常に多い。それ故、古墳分布そのものの動態の分析が別途必要である。これについては稿を改めて論じたい。

註5：それぞれ下垣氏(2003a)の対置式神獸鏡B系、二神二獸鏡II系に位置づけられる。

註6：ただし名島古墳出土の三角縁神獸鏡(他・108)は、第II～III段階と幅を持たせておきたい。

註7：本稿は2003年に九州大学に提出した博士学位論文の一部をもとに加筆・修正したものである。日常的に御指導・御教示いただいている田中良之先生、岩永省三先生、宮本一夫先生、溝口孝司先生、中橋孝博先生、佐藤廉也先生、西健一郎氏、石川健氏に厚く御礼を申し上げます。なお本稿は平成18年度科学研究費補助金若手研究(B)の成果の一部である。

【文献】

- 穴沢啄光 1985 「三角縁神獸鏡と威信財システム」『潮流』4・5、いわき地域学会。
穴沢啄光 1995 「世界史の中の日本古墳文化」『文明学原論』、江上波夫先生米寿記念論集、山川出版社。
岩永省三 1989 「土器から見た弥生時代社会の動態―北部九州地方の後期を中心として―」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』、横山浩一先生退官記念事業会。
岩永省三 2002 「階級社会への道への路」佐原 真編『古代を考える 稲・金属・戦争―弥

古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理

- 生一』、吉川弘文館。
- 岩永省三 2003 「古代国家形成過程と親族構造論」『九州大学総合研究博物館研究報告』1。
- 岩永省三 2006 「国家形成の東アジアモデル」『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティー』、すいれん舎。
- 大久保徹也 2003 「古墳時代研究における『首長』概念の問題」『古墳時代の政治構造』、青木書店。
- 大久保徹也 2006 「備讃地域における前方後円墳出現期の様相」『日本考古学協会2006年度大会研究発表要旨』。
- 岡村秀典 1986 「中国の鏡」『弥生文化の研究』6、雄山閣。
- 岡村秀典 1990 「卑弥呼の鏡」都出比呂志・山本三郎編『邪馬台国の時代』、木自社。
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55。
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獣鏡の時代』、吉川弘文館。
- 小田富士雄 1966 「九州」『日本の考古学』Ⅳ、河出書房新社。
- 小田富士雄 1970 「畿内型古墳の伝播」『古代の日本』3、角川書店。
- 川西宏幸 2000 「同型鏡考」『筑波大学先史学・考古学研究』11。
- 川西宏幸 2004 『同型鏡とワカタケル』、同成社。
- 河野一隆 1998 「副葬品生産・流通システム論—付・威信財消費型経済システムの提唱—」『中期古墳の展開と変革』第44回埋蔵文化財研究集会発表要旨集。
- 九州考古学会 1950 『北九州古文化図鑑』第一輯、福岡県高等学校教職員組合。
- 久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅩ。
- 久住猛雄 2002 「九州における前期古墳の成立」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表資料集』、日本考古学協会。
- 久住猛雄 2006 「遺跡の位置と周辺の歴史的環境」『元岡・桑原遺跡群6』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集。
- 車崎正彦 1993 「鬮籠鏡考」『翔古論聚』、久保哲三先生追悼論文集刊行会。
- 車崎正彦編 2002 『考古資料大観 5鏡』、小学館。
- 小林行雄 1950 「古墳時代における文化の伝播」『史林』33-3・4（「中期古墳時代文化とその伝播」『古墳時代の研究』、青木書店に採録）。
- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』38-1。
- 小林行雄 1961 『古墳時代の研究』、青木書店。
- 小山田宏一 1994 「3世紀の鏡—漢鏡7期の流入の始まりと三角縁神獣鏡との関係」『倭人と鏡 その2』、埋蔵文化財研究会。
- 近藤義郎 1966 「古墳とはなにか」『日本の考古学』Ⅳ、河出書房新社。
- 近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』、岩波書店。
- 近藤義郎・春成秀爾 1967 「埴輪の起源」『考古学研究』13-3。

古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理

- 重藤輝行 1998 「古墳時代中期における北部九州の首長と社会」『中期古墳の展開と変革』第44回埋蔵文化財研究会発表要旨集。
- 重藤輝行・西健一郎 1995 「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性—東部の前期・中期古墳を例として—」『日本考古学』2、日本考古学協会。
- 下垣仁志 2003a 「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』49。
- 下垣仁志 2003b 「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』50（上）。
- 下垣仁志 2005 「倭王権と文物・祭式の流通」前川和也・岡村秀典編『国家形成の比較研究』、学生社。
- 白石太一郎・杉山晋作・設楽博巳編 1994 「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』56。
- 白石太一郎・設楽博巳編 2002 「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成 補遺1」『国立歴史民俗博物館研究報告』97。
- 高倉洋彰 1981 「鏡」森浩一編『三世紀の考古学』中巻、学生社。
- 高橋 徹 1986 「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』60。
- 田中 琢 1979 『日本の原始美術 8 古鏡』、講談社。
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究』、柏書房。
- 田中良之 2000 「墓からみた親族・家族」『古代史の論点2』、小学館。
- 田中良之 2003 「古代の家族」『いくつもの日本VI 女の領域・男の領域』、岩波書店。
- 田中良之 2004 『人骨・墳墓からみた前半期古墳時代集団構造の研究』平成14～15年度科学研究費補助金（基盤研究(C)2）研究成果報告書。
- 田中良之 2006 「国家形成下の倭人たち」『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ—』、すいれん舎。
- 辻田淳一郎 2000 「甕鏡の生成・変容過程に関する再検討」『考古学研究』46-4。
- 辻田淳一郎 2001 「古墳時代開始期における中国鏡流通形態とその画期」『古文化談叢』46。
- 辻田淳一郎 2005a 「破鏡の伝世と副葬」『史淵』142。
- 辻田淳一郎 2005b 「弥生時代～古墳時代の銅鏡—山口県内出土鏡を対象として—」『鏡の中の宇宙』、山口県立萩美術館・浦上記念館。
- 辻田淳一郎 2006a 「威信財システムの成立・変容とアイデンティティ」『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ—』、すいれん舎。
- 辻田淳一郎 2006b 「鏡と副葬品」『前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会。
- 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権」『講座日本史1』、東京大学出版会。
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22、史学篇。
- 都出比呂志編 1999 『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』（平成8年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤B・一般2）研究成果報告書）、大阪大学文学部。
- 都出比呂志 2005 『前方後円墳と社会』、塙書房。

古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理

- 寺澤 薫 2005 「古墳時代開始期の歴年代と伝世鏡論（上）（下）」『古代学研究』169-170、
古代学研究会。
- 富岡謙蔵 1920 『古鏡の研究』、丸善。
- 内藤 晃 1959 「古墳文化の成立—いわゆる伝世鏡理論を中心として—」『歴史学研究』236。
- 内藤 晃 1960 「古墳文化の発展—同範鏡問題の再検討—」『日本史研究』48。
- 西村俊範 1983 「双頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜」『史林』66-1。
- 土生田純之 2004 「首長墓造営地の移動と固定」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』。
- 土生田純之 2006 「国家形成と王墓」『考古学研究』52-4。
- 林 正憲 2000 「古墳時代前期における倭鏡の製作」『考古学雑誌』85-4、日本考古学会。
- 春成秀爾 1984 「前方後円墳論」『東アジア世界における日本古代史講座』2、学生社。
- 樋口隆康 1955 「九州古墳墓の性格」『史林』38-3、史学研究会。
- 樋口隆康 1979 『古鏡』、新潮社。
- 福岡県教育委員会 1971 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集。
- 福岡市教育委員会 2001 『羽根戸南古墳群』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集。
- 福岡市教育委員会 2005a 『元岡・桑原遺跡群5』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集。
- 福岡市教育委員会 2005b 『金武2』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第866集。
- 福岡市教育委員会 2006 『元岡・桑原遺跡群6』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集。
- 福永伸哉 1994a 「仿製三角縁神獸鏡の編年と製作背景」『考古学研究』41-1。
- 福永伸哉 2005 『三角縁神獸鏡の研究』、大阪大学出版会。
- 福永伸哉・森下章司 2000 「河北省出土の魏晉鏡」『史林』83-1。
- 北條芳隆 1990 「古墳成立期における地域間の相互作用」『考古学研究』37-2。
- 北條芳隆 1999 「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』、大阪大学文学部考古学研究室。
- 北條芳隆 2000 「前方後円墳と倭王権」北條芳隆・溝口孝司・村上恭通『古墳時代像を見なおす』、青木書店。
- 北條芳隆・溝口孝司・村上恭通 2000 『古墳時代像を見なおす』、青木書店。
- 北條芳隆 2005 「基調報告：前方後円墳出現期に託された幻想としての『日本文化』成立過程」『東海史学』39。
- 前原市教育委員会 1995 『茨浦』、前原市文化財調査報告書第58集。
- 溝口孝司 1988 「古墳出現前後の土器相—筑前地方を素材として—」『考古学研究』35-2。
- 溝口孝司 1993 「『記憶』と『時間』—その葬送儀礼と社会構造の再生産において果たす役割」『九州文化史研究所紀要』38。
- 溝口孝司 2000a 「古墳時代開始期の理解をめぐる問題点—弥生墓制研究史の視点から—」
北條芳隆・溝口孝司・村上恭通『古墳時代像を見なおす』、青木書店。

古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理

- 溝口孝司 2000b 「墓地と埋葬行為の変遷—古墳時代の開始の社会的背景の理解のために」北條芳隆・溝口孝司・村上恭通『古墳時代像を見なおす』、青木書店。
- 森 格也 1987 「後漢鏡をめぐる諸問題」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』1。
- 森貞次郎・佐野 一 1968 「重留箱式石棺」『有田遺跡』、福岡市教育委員会。
- 森岡秀人 1994 「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」『倭人と鏡 その2』、埋蔵文化財研究会。
- 森岡秀人 2006 「三世紀の鏡—ツクシとヤマト—」奈良県香芝市二上山博物館編『邪馬台国時代のツクシとヤマト』、学生社。
- 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74-6。
- 森下章司 1997 「三角縁神獣鏡と前期古墳」『考古学ジャーナル』421。
- 森下章司 1998a 「鏡の伝世」『史林』81-4。
- 森下章司 1998b 「古墳時代前期の年代試論」『古代』105。
- 森下章司 2002 「古墳時代倭鏡」『考古資料大観5鏡』、小学館。
- 森下章司 2005a 「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』89-1。
- 森下章司 2005b 「器物の生産・授受・保有形態と王権」前川和也・岡村秀典編『国家形成の比較研究』、学生社。
- 森下章司 2006 「喇嘛洞出土の銅鏡をめぐる」『東アジア考古学論叢』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所。
- 柳沢一男 1995 「筑前における古墳時代首長墓系譜の動向」『九州における古墳時代首長墓の動向』、九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会。
- 柳田康雄 1982 「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会。
- 柳田康雄 2002 『九州弥生文化の研究』、学生社。
- 横田健一 1958 「日本古代における鏡の移動」『古代文化』1958-1。
- 吉留秀敏 1989 「九州の割竹形木棺」『古文化談叢』20(中)。
- 吉留秀敏 1990 「北部九州の前期古墳と埋葬主体」『考古学研究』36-4。
- 吉留秀敏 1991 「前期古墳と階層秩序」『古文化談叢』26。
- 和田晴吾 1986 「金属器の生産と流通」『岩波講座 日本考古学』3、岩波書店。
- 和田晴吾 2004 「古墳文化論」『日本史講座1』、東京大学出版会。

Barrett, J. 1988 The living, the dead and the ancestors: Neolithic and early bronze age mortuary practices. in Barrett, J. and Kinnes, I. (eds) *The Archaeology of Context in the Neolithic and Bronze Age Recent Trends*. Sheffield Academic Press.

Friedman, J. and Rowlands, M. 1977 Notes towards an epigenetic model of the evolution of civilization. in Friedman, J. and Rowlands, M. (eds.) *The Evolution of Social Systems*. Duckworth.

古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理

Giddens, A. 1979 *Central Problems in Social Theory*. University of California Press. (友枝敏雄・今田高俊・森 重雄 訳 1989 『社会理論の最前線』、ハーベスト社。)

【挿図出典】

図1・図2：筆者作成。図3-1：福岡県教委（1971）、2：森・佐野（1968）、3：九州考古学会（1950）、4：福岡市教委（2005b）、5：福岡市教委（2005a）、6：福岡市教委（2001）。